



横浜DX戦略 <仮称>

戦略の方向性/骨子案

デジタル×デザイン Yokohama

2022/1/28

横浜市デジタル統括本部

Digital Design

デジタル×デザイン

デジタル化の波をただ受け入れるだけでなく
その恩恵を市民や地域に行きわたらせ
魅力溢れる都市をつくるために
自らイニシアチブをとり
デジタルの実装を
デザインする

DX Digital Transformation

DXは、デジタル技術を活用した変革です。

デジタル(Digital)と変革を意味するトランスフォーメーション(Transformation)を掛け合わせた造語で、様々なモノやサービスがデジタル化により便利になったり効率化され、その結果デジタル技術が社会に浸透することで、それまでには実現できなかった新たなサービスや価値が生まれる、社会やサービスの変革を意味します。

*トランスフォーメーション

もともとの形態や機能が大きく変化する「変容、変革」です

「Trans」は「Cross=X」と同義語で既存のものを「超える」の意

「formation」は「形」の意

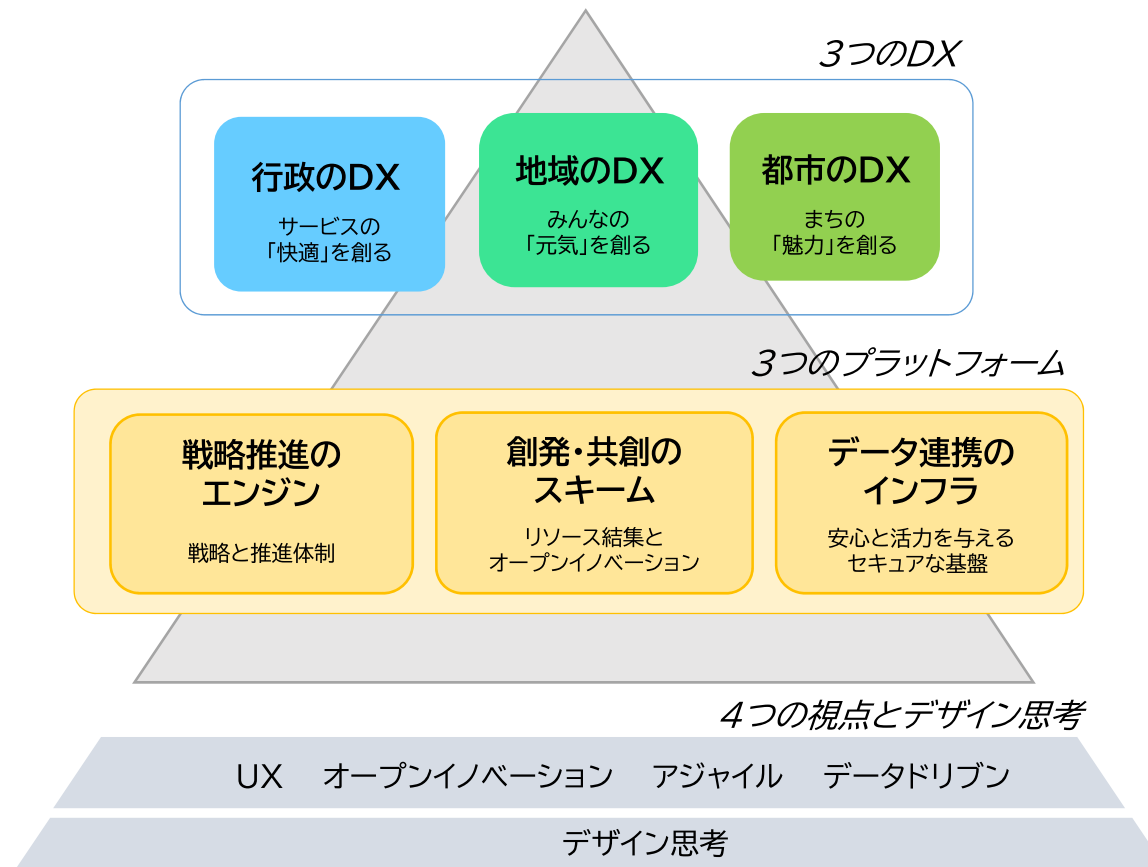
デジタルは手段であって目的ではありません。

DXで重要なのは、変革によってもたらされる新たな価値の創造です。

デジタル実装を“3つのDX”と“3つのプラットフォーム”でデジタル×デザイン！

“横浜DX戦略”（仮称）

～ デジタル×デザインで未来を切り開く ～



●3つのDX

持続可能な横浜の未来のため
快適なサービスを創る行政のDX
みんなの元気を創る地域のDX
まちの魅力を創る都市のDXを
総合的に推進します

●3つのプラットフォーム

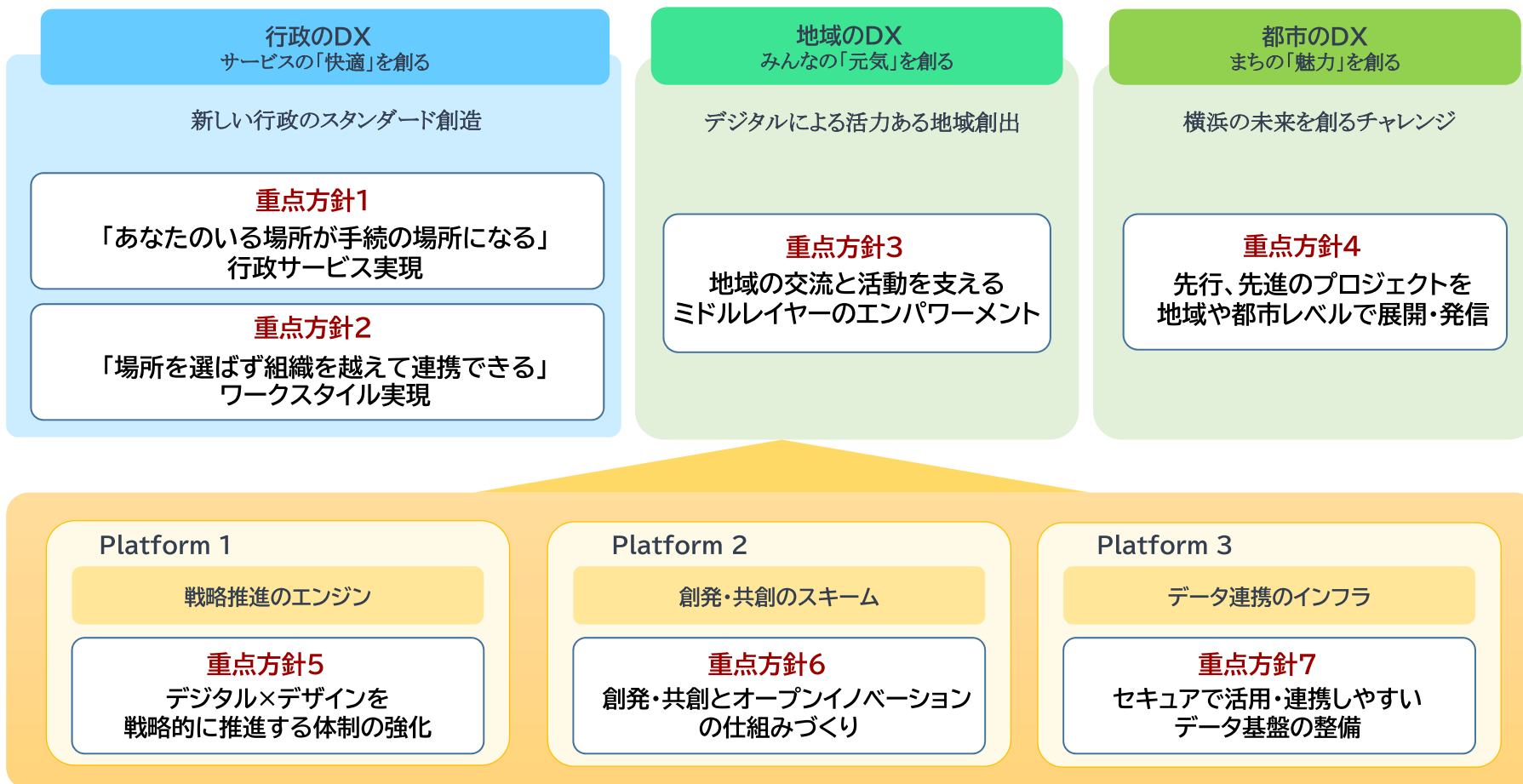
DX戦略の推進を支える基盤として
「戦略推進のエンジン」
「創発・共創のスキーム」
「データ連携のインフラ」を
整備し相互に連動させます

●4つの視点とデザイン思考

デザイン思考をベースに
「UX」「オープンイノベーション」
「アジャイル」「データドリブン」の
4つの視点を重視し取り組みます

DX実現に向けた“First Step(2022~25年)”を7つの重点方針で取り組む！

DXに本格的に取り組む最初の期間では、推進体制や仕組みなどの土台作りと、デジタルの恩恵を実感できる取組や成功事例の見える化などを中心に取り組めます。



目次

I DX戦略の概要

1. 戦略策定の背景
2. 戦略の位置づけ
3. 戦略の基本目的
4. 戦略の骨格「3つのDX」と「3つのプラットフォーム」
5. 戦略の推進方法

II 7つの重点方針

- 重点方針1: 「あなたのいる場所が手続の場所になる」行政サービス実現
- 重点方針2: 「場所を選ばず組織を越えて連携できる」ワークスタイル実現
- 重点方針3: 地域の交流と活動を支えるミドルレイヤーのエンパワーメント
- 重点方針4: 先行、先進のプロジェクトを地域や都市レベルで展開・発信
- 重点方針5: デジタル×デザインを戦略的に推進する体制の強化
- 重点方針6: 創発・共創とオープンイノベーションの仕組みづくり
- 重点方針7: セキュアで活用・連携しやすいデータ基盤の整備

* 附属:用語解説、参考資料

I DX戦略の概要

1. 戦略策定の背景

デジタル化による社会生活の急速な変化、多様で複雑な課題に直面するなかDXは解決の鍵となります。

スマートフォンの普及とネットワークの高速化が、社会生活とビジネス環境をわずか10年の間に一変させたように、デジタル化の波は圧倒的な速さで私たちに押し寄せています。

我が国は、グローバル化による激しい国際競争にさらされる中、人口減少、少子高齢化が急速に進み、かつてない社会課題に直面する課題先進国であり、さらに、生産年齢人口の減少による労働力不足が懸念されています。

横浜市では、多発する自然災害の対応、少子高齢化を背景とする福祉、地域交通、地域の担い手不足の問題や、高度成長期に集中整備されたインフラの老朽化など、大都市が抱える多様で複雑な地域課題に直面しています。

また、コロナ禍を背景に顕在化した非効率な行政サービスやアフターコロナを見据えた経済社会への対応が求められており、厳しい財政状況下で、これまでのやり方のままで課題を解決していくことは困難です。

DXは、デジタル技術を用いて様々な課題を解決し、新たな価値を生み出す変革の力です。民間人材の活用や多様な主体との連携を通じ、DXに取り組むことで、デジタル技術を最大限に活用した未来の大都市を実現していく必要があります。

2. 戦略の位置づけ

DX実現に向けた方針・方向性を共有し、柔軟な施策・手法の選択を大切にする『戦略』とします。

戦略の性格

デジタル技術を取り巻く環境は、極めて変化が速く、先行きの予測が難しいことから、DX実現に向けて取り組む施策・事業やその事業手法、事業量、スケジュールを「計画」として詳細に示すのではなく、DX実現に向けた方針・方向性の共有と、柔軟な施策・手法の選択を大切にする『戦略』として作成することとします。

今回の戦略では、DX推進の背景と横浜市がめざす行政サービス(行政のDX)の姿を示したうえで、2025年までの4年間を最初の戦略期間とし、その期間に取り組むべき重点施策を明らかにします。

DXに関連する法や条例との関係

総務省が令和2年12月に策定した「自治体DX推進計画」に対応するとともに、横浜市官民データ活用推進基本条例第3条に基づく「横浜市官民データ活用推進計画」を兼ねるものとして位置づけます。

3. 戦略の基本目的

“デジタルの恩恵をすべての市民、地域に行きわたらせ、魅力あふれる都市をつくる”
を基本目的に横浜のDXを推進します。

デジタル化の進展は、スマートフォンからの様々な情報やサービスの利用、多くの人との繋がり、手続や作業の自動化など、私たちの生活を、時間と場所の制約から解放し、便利で豊かなものになっています。

今後、必要なサービスが、必要な時、必要な場所で、自ら考え選択することなく届けられる「手続がまるで空気のような世界」が実現するのも、決して夢物語ではありません。

デジタルの恩恵を、限られた人や地域だけでなく、すべての市民、地域に行きわたらせ、実感あるものとし、真の意味でデジタルの持つ力を、都市の魅力に落とし込んでいくことが大切です。

市民には、子どもや高齢者、子育て世代、障害のある方、外国人の方など、それぞれ異なるニーズがあります。デジタル技術を活かし、デジタルを必ずしも得意としない方にも寄り添いながら、一人ひとりに利便性の高いサービスを効率的に届けていきます。

地域には、少子高齢化やグローバル化に加え、デジタル化が進行する中で、時代にあったコミュニティの創造が必要となっています。これまで築いてきた「温もりあるつながり」を大切にしつつ、デジタルのメリットを最大限に活かした「新しいつながり」で、見守り、助け合い、安全安心など連携による地域力向上を図ります。

都市には、暮らしやすさ、魅力づくりにデジタル技術をどう活かすかが求められています。都心部、郊外部それぞれの課題解決と新たな価値創造に向け、多様な主体と連携しデジタルの実証から実装へとつなげ、住みやすく、働きやすく、活気ある横浜、訪れてみたい魅力ある横浜を創造します。

私たちは、「デジタルの恩恵をすべての市民、地域に行きわたらせ、魅力あふれる都市をつくる」ことを目的として、「デジタル×デザイン」をキーワードに取組を重ねて、DX戦略を進めます。

「デジタル×デザイン」によるDXの推進

デジタル化は「時間」や「場所」にとらわれないライフスタイルを実現し、「自動化」による効率化など多くの恩恵をもたらします。くらし、地域、都市のデジタル化によって、市民や地域をより豊かにすることが期待されています。

しかし、その恩恵を得るためには、使いやすく、手間が無く、便利さを実感でき、多くの人に利用されて効果があるものでなければなりません。そのためには、今あるサービスをそのままデジタル化するのではなく、利用者目線で考える、サービスのあり方から見直すなど、仕組みをしっかりと考えるプロセスを経て「デザイン(設計)」していくことが重要です。

一方で、“つながる”ことによるプライバシーの侵害、情報の流出・悪用や、デジタルを使えないために、“つながれず”取り残されてしまう人や地域の存在もあります。また、特定の人や地域にとって便利で効率的なサービスであっても、そのサービスの外にいる人や地域にとっては必ずしも望ましいものでないことがあることも忘れてはなりません。

DXを、すべての市民や地域の豊かさにつなげる誰も取り残さない変革とするためには、目の前の利便性を追求するだけでなく、様々な分野への波及も考える、「木を見て森も見る」思考が不可欠です。

デジタル化の波をただ受け入れるのではなく、行政、市民が自らイニシアチブをとり、多様な主体との連携で横浜の未来につながる「人や地域中心のデジタル実装」をプロセス、仕組みを含めデザインしていくことが大切です。

横浜のDXは、「デジタルの恩恵をすべての市民、地域に行きわたらせ、魅力あふれる都市をつくる」ため “デジタル×デザイン” をキーワードに、「行政、地域、都市の3つのレイヤー」で「3つのプラットフォーム」を駆動させ推進します。

【デザイン(design)とは?】

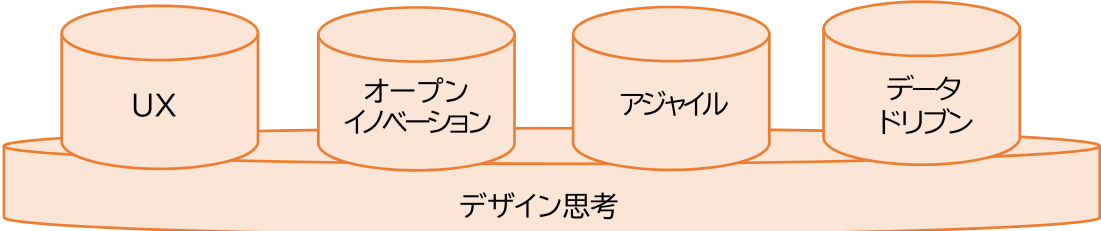
一般的に「デザイン」は、デザイナーが設計した衣服や建築物の意匠、見た目をイメージしますが、横浜のDXがキーワードとする「デジタルデザイン」は、デザイナーが設計する際に用いる人間中心のプロセス「デザイン思考」の考え方をベースとするものです。

横浜DX戦略では、「デザイン」を技術ありきの発想ではなく、デジタルで解決すべき問題の本質を現場から見出し、アイデアを出し合い、試行し、ユーザーと共に進化させるプロセスで、全体最適を考えながら「市民や地域中心」のサービスの開発・実装を設計する、意で用います。

4つの視点とデザイン思考

デジタル×デザインの実践にあたっては、
次の「4つの視点」とそれを支える「デザイン思考」を基本姿勢とします。

4つの視点とデザイン思考



- ・UX(ユーザーエクスペリエンス) 利用者が便利を実感できる体験を大切にします。
- ・オープンイノベーション 市民や企業との参加・協力の場を大切にします。
- ・アジャイル 試行と修正を素早く繰り返して、企画、設計、開発、構築します。
- ・データドリブン データを収集・分析して、課題を把握し解決を考えます。

- ・デザイン思考 5つのプロセスにより課題解決に取り組みます。
共感 >> 問題提起 >> 創造 >> プロトタイプ >> テスト

4. 戦略の骨格:「3つのDX」と「3つのプラットフォーム」

3つのプラットフォームを駆動させ、行政、地域、都市の3つのレイヤーでDXを推進します。

○ 行政、地域、都市の「3つのDX」

1 サービスの「快適」を創る **行政のDX**

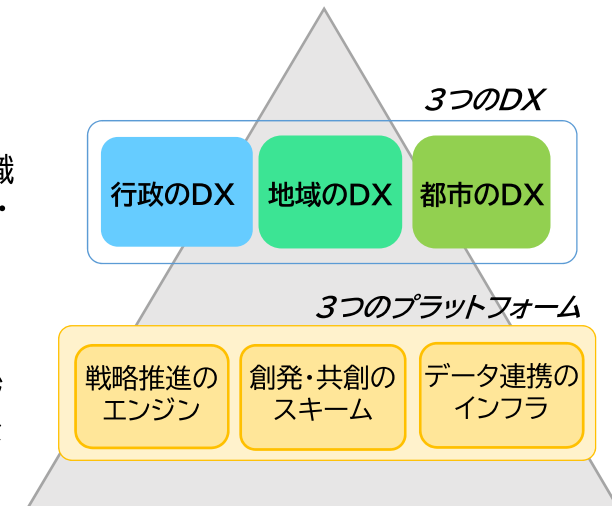
スマートフォンの活用など市民が使いやすい行政サービスの提供、場所や組織を選ばないワークスタイルの推進と業務効率化、それを支える職員の意識改革・人材育成に取り組み、新しい行政のスタンダードを創り出します。

2 みんなの「元気」を創る **地域のDX**

デジタル技術を活用した地域の担い手や地域拠点の支援、地域を支えるデジタル区役所の創造、リアルとデジタルのベストミックスによる災害や福祉対応などの地域力向上で、活力ある地域を創り出します。

3 まちの「魅力」を創る **都市のDX**

都市を構成する、暮らし、産業、環境、インフラなど様々な分野においてデジタルを活用した街づくりに取り組みます。郊外部では地域課題の解決と新たな価値の創造、都心部では最先端技術を活用した魅力の創造と発信により、横浜の未来を創るチャレンジを重ねます。



○ DX戦略の推進を支える「3つのプラットフォーム」

「戦略推進のエンジン」、「創発・共創のスキーム」、「データ連携のインフラ」

行政、地域、都市の3つのDX戦略の推進を支える基盤として、3つのプラットフォームを整備し、相互に連動させることにより取組を加速します。

4. 戦略の骨格:「3つのDX」と「3つのプラットフォーム」

めざす行政サービスの姿 = 行政のDX ~デジタルで時間をデザインします~

これまでの対面と紙がベースの行政サービスは、手順とその後の処理に多くの時間を要していました。

目指すのは、誰もが真に求める行政サービスを容易に手にすることができる、**手順・処理を空気のように意識しない「時間や場所にとらわれない」UXに優れた行政サービスの姿**です。

行政の変化を地域や都市に広げ、相互に連動させていきます。

手順・処理が“空気になる”行政サービスの

とき
時間をデザインする

これまでの行政サービス

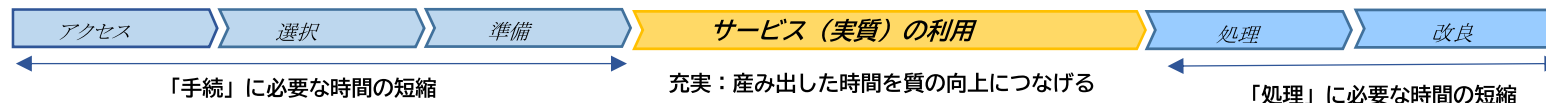
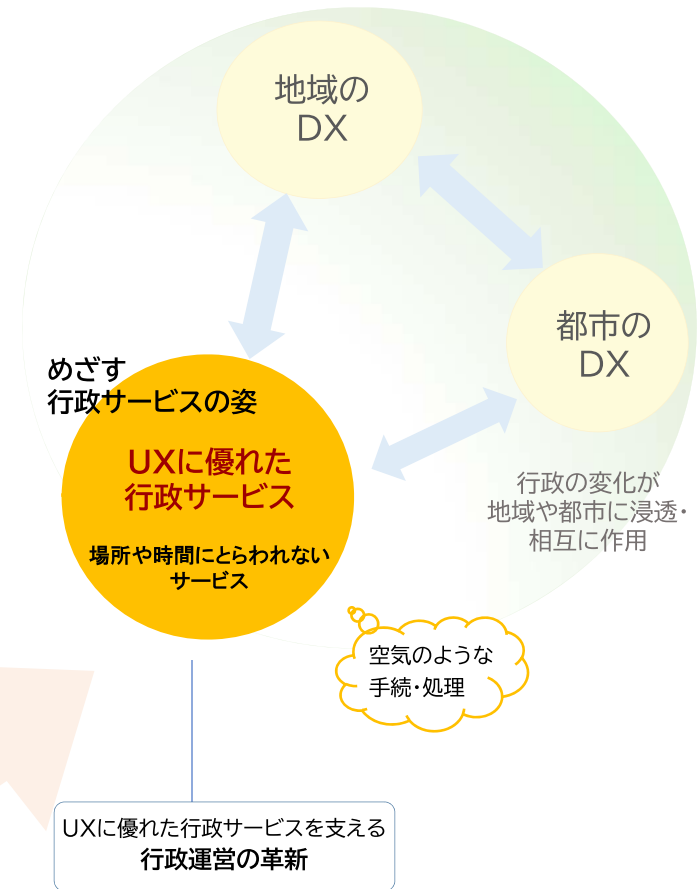


デジタル技術を活用し
リードタイムを短縮

行政サービスの

アクセスの時間をデザインする
選択・準備の時間をデザインする
処理・改良の時間をデザインする

そして、
必要な人に必要なサービスを迅速に届ける行政のDX



5. 戦略の推進方法

DXに本格的に取り組む最初の4年間で、DX実現に向けた“ First Step ”と位置づけ、戦略推進の土台づくりと初動のアクションを中心に、7つの重点方針を掲げ取り組めます。

■ 戦略のFirst Step

令和4年度(2022)から令和7年度(2025)の4年間

■ 4年間の位置づけ=デジタル実装のFirst Step

DXに本格的に取り組む最初の期間として、戦略推進の土台づくりとDX実現に向けた初動のアクションを重視して、7つの重点方針を掲げて取り組めます。

1 戦略推進の土台づくり

- ・横浜のDX推進の基本戦略策定と共有
- ・DX実現に向けた推進体制と仕組みづくり

2 初動のアクション

- ・デジタルの恩恵を実感できる取組からの着手
- ・成功事例の創出による横展開の誘発
- ・リアルとデジタルのベストミックスのハイブリッド展開

7つの重点方針

II章参照

■ 戦略の推進体制

市長のリーダーシップの下、全区局統括本部長が参加するDX推進本部で、戦略の目的・方向性を全庁共有し、戦略性を持って取組を加速させていきます。

■ 戦略の進行管理

DX推進本部で戦略の進行状況の定期的な確認等を行い、必要に応じて重点方針の追加や見直しなどを行い、国や社会、技術動向などにも柔軟に対応しながら取組を進めていきます。

Ⅱ 7つの重点方針

- デジタル実装のFirst Stepの取組 -

「7つの重点方針」 - デジタル実装のFirst Stepの取組 -

DXの実現に向けて最初の4年間でデジタル実装のFirst Stepとして、推進体制や仕組みづくりなどの土台作りと、デジタルの恩恵が実感できる取組や成功事例の見える化などを中心に、7つの重点方針を定め、戦略的にDXを推進していきます。

1 「あなたのいる場所が手続の場所になる」行政サービス実現

行政の
DX

2 「場所を選ばず組織を越えて連携できる」ワークスタイル実現

行政の
DX

3 地域の交流と活動を支えるミドルレイヤーのエンパワーメント

行政の
DX

地域の
DX

4 先行、先進のプロジェクトを地域や都市レベルで展開・発信

地域の
DX

都市の
DX

5 デジタル×デザインを戦略的に推進する体制の強化

戦略推進の
エンジン

6 創発・共創とオープンイノベーションの仕組みづくり

創発・共創の
スキーム

7 セキュアで活用・連携しやすいデータ基盤の整備

データ連携の
インフラ

重点方針1：「あなたのいる場所が手続の場所になる」行政サービス実現

- ・原則すべての行政手続をスマートフォン対応とし、手数料の電子決済・納付を可能にします。
- ・相談や情報提供などにもデジタルを活用し、市民の「便利」と行政の「効率化」を追求します。
- ・子育て、お悔みなどのライフイベントや手続のシーンを意識したオンライン化を進めます。

■ スマートフォンに対応した行政サービスの加速

現在、その多くが来庁、対面での手続を前提としている約10,000種類の手続について、手続の特性や件数、複雑さなどに応じ、マイナポータルや電子申請・届出システム、個別システムなど様々な手法を柔軟に組み合わせ、優先度の高いものからオンライン化を進めます。まずは、「あなたのいる場所が手続の場所になる」を合言葉に、すべての手続をスマートフォンから行える環境づくりから着手します。併せて、手数料の電子決済・納付対応も進めます。また、オンラインでの認証基盤となるマイナンバーカードの保有率向上の取組を継続するとともに、2022年度末予定のカード機能のスマートフォン搭載開始等もとらえ、マイナンバーカードの更なる普及啓発・利活用を図ります。

ビデオ会議による相談窓口やアプリを使った広報・防災情報の発信など、デジタルサービスのメリットを活かし、相談や情報提供など市民の皆様が使いやすい行政サービスのデジタル化に取り組んでいきます。また、市民の皆様にとっての便利が、行政内部の業務効率化にもつながるよう取組を進めていきます。

「デジタルファースト」「ワンスオンリー」「コネクテッドワンストップ」のデジタル化原則のもと、出産・子育てなどのライフイベントや、お悔み・引越しなどの煩雑な手続に着目したオンライン化など、実際にお使いいただく市民の皆様が便利さを一層実感できるように工夫しながら取り組んでいきます。

[R4予算事業例]ぴったりサービスと各業務システムの連携、社会保障・税番号制度(マイナンバー制度)への対応、図書館情報システム・市民利用施設予約システムの再構築、電子申請・届出システムの運用など

重点方針2：「場所を選ばず組織を越えて連携できる」ワークスタイル実現

- ・庁内ネットワークを再構築し、クラウドサービスを活用した場所を選ばない働き方を推進します。
- ・AI、RPAの活用、財務会計・人事給与・住民系情報システム等の刷新を契機に業務変革を進めます。
- ・全庁的な意識改革の取組と、デジタル技術を活かして変革を推進する人材の確保・育成を進めます。

生産年齢人口の減少に伴い人材確保が困難になっていく中、限られた人材を最大限に活用して行政運営を行っていくことが不可欠となっています。また、災害や感染症などの緊急事態には、組織の壁を取り払って連携し迅速かつ適切に対応していくことが求められています。

そのため、デジタル技術を最大限に活用し、場所を選ばず組織を越えた連携が可能となる働き方を実現するとともに、自動化による業務の効率化に取り組み、職員の生産性向上を図ってきます。

■ 場所を選ばないワークスタイルの実現

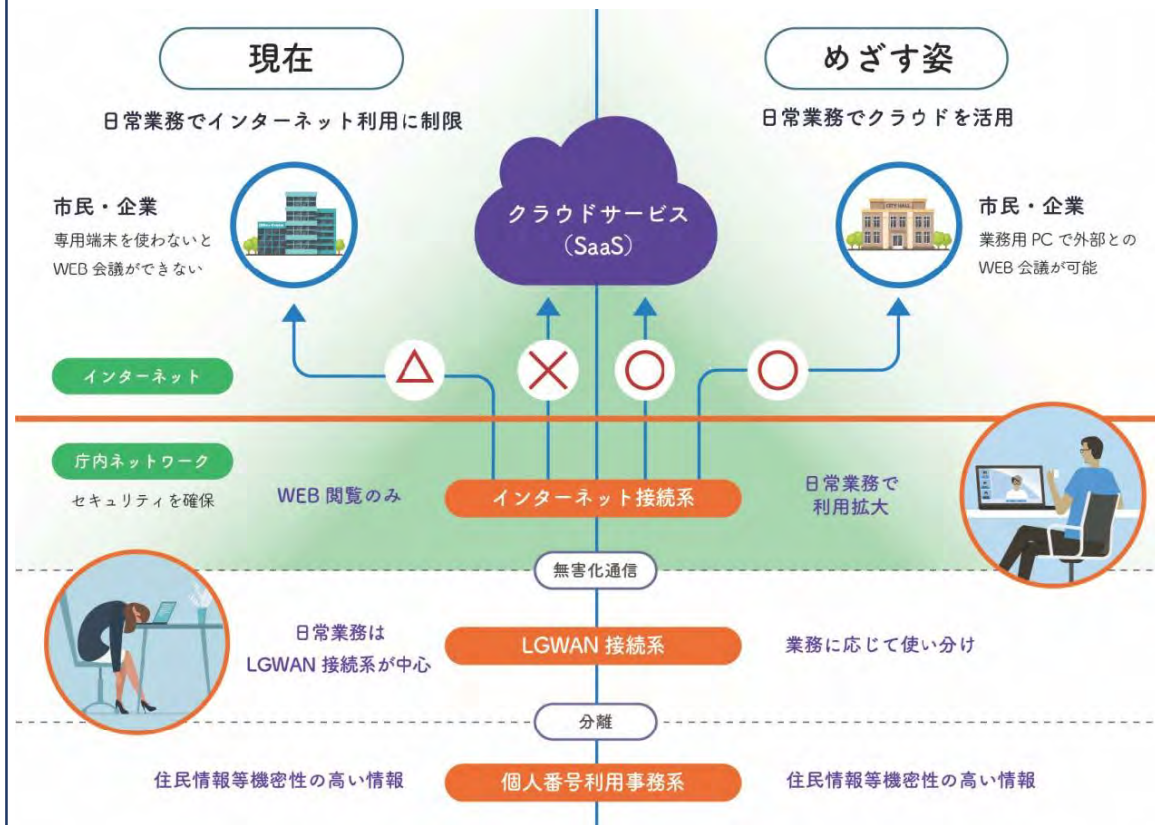
現在の庁内ネットワークは、国が自治体に推奨するセキュリティ対策「3層分離」の構成(αモデル)のため、WEB会議やクラウドサービスや外部からの電子メール利用が難しい環境になっています。

そこで、WEBでの会議、メールやチャットなどによるコミュニケーションの向上、クラウドサービスを活用した業務効率化などを可能とする、「βモデル」への移行を図り、高度なセキュリティ対策とインターネットへの親和性を併せ持つ、新たな庁内ネットワークの整備を梃に「場所を選ばず組織を超えて連携できる」ワークスタイルの実現を加速させます。

[R4予算事業例]インターネット利用環境再整備、クラウドサービス導入検討

「攻守バランス型」の庁内ネットワーク(βモデル)への再構築

日本年金機構の個人情報漏えい事件※を契機に、国は、自治体のネットワークを3つに分離し、職員の業務用PCをインターネットと直接通信できないネットワークに置く構成「αモデル」を標準としました。現在、ほとんどの自治体がαモデルを採用し、インターネットからのサイバー攻撃対策として非常に有効に機能しています。その一方、インターネット利用はWEB閲覧が中心であり、WEB会議をはじめ、クラウドサービスの活用は著しく制限されています。



このため、令和4年度末を目途に、国が新たに示した「β'モデル」への移行を行い、個別のPCの挙動からサイバー攻撃の予兆を検知・対応できる高度なセキュリティ対策(EDR)を導入したうえで、職員が通常利用するPCをインターネットと直接通信できるネットワークに置く構成へと変更します。

クラウドサービスの利活用の推進などにより、「場所を選ばず組織を越えて連携できる」ワークスタイルの実現を目指していきます。

※平成27年5月に日本年金機構がサイバー攻撃を受け、125万件の個人情報が漏えいした事件

■ デジタルを活用した業務効率化

現在の業務は、システムへの入力や照合作業などのルーティンワークや、電子メール、Word・Excelファイルでの集約・集計作業に多くの時間を割いてきました。しかし、RPA、AI-OCRやノーコード・ローコードツールなどのデジタル技術は、高度な専門技術の習得なしに単純反復作業を自動化・効率化するロボットやシステムの開発を可能としており、内製化の動きも広がっています。

今後、RPAやAI-OCRの導入、RPAの共用環境の整備と研修により、現場の職員による内製化についても進めていきます。また、財務会計システムを再構築しローコードプラットフォームを活用して予算・決算関連作業の「脱メール化」による効率化を図り、さらに人事給与システムの再構築や住民情報系システムの標準化など、市の基幹を支えるシステムの刷新を契機とした事務見直し等により、業務効率化を進め、職員の生産性向上を図ります。

[R4予算事業例]母子保健等へのRPA導入、RPA庁内環境整備、財務会計・人事給与システムの再構築など

■ 職員の意識改革とデジタル人材の確保・育成

デジタル×デザインの実践に向けて、大学・民間とも連携しUXの視点やデザイン思考などの全庁的な研修を実施します。専門人材の確保では、令和3年度から社会人枠の採用試験も開始したデジタル職の採用拡大、副業・兼業を含む民間人材の活用や既存の内部人材のDX人材へのリスクリングも進めます。

また、区局の現場には、デジタル・デザイン担当を設け、デジタル×デザインの意義を区局内に浸透させていくとともに、専門人材の区局への配属も順次進めていきます。

さらに、デジタル区役所のモデル区などでの実証で生まれた変化を庁内に広く周知・共有するほか、民間人材との交流促進などにより職員の意識を高め、変革に前向きな組織風土を醸成していきます。

[R4予算事業例]デザイン思考研修など

重点方針3 :地域の交流と活動を支えるミドルレイヤーのエンパワーメント

- ・区役所、地域拠点、地域の担い手の層「ミドルレイヤー」を地域のDXの重点項目とします。
- ・「ミドルレイヤー」の活動、機能、相互連携の強化と新たな担い手の創出をデジタルで促進します。
- ・「デジタル区役所」のモデル区を2区選定し、地域のデジタル化を重点的に推進します。

災害や福祉対応など377万の人口を抱える大都市横浜の安全安心は、18の区役所、学校（地域防災拠点）、地域ケアプラザなど様々な地域拠点と自治会町内会を始めとした多様な地域の担い手の方々の連携で成り立っています。しかし、少子高齢化に伴う担い手不足に加え、地域課題が多様化・複雑化するなかで、これまで通りのやり方で課題を乗り越えていくことは難しくなっています。

さらに、コロナ禍により地域の活動は制限され、地域と共にある行政サービスは大きな影響を受けました。地域拠点には、新たな生活様式に対応するため急速にWi-Fiが整備されましたが、一方で区役所は、セキュリティ対策の観点からインターネット 利用が制限されており、デジタルの活用による地域と連携した取組、事業が行いにくい環境となっています。

区役所と地域拠点*1、地域活動の担い手*2からなる、地域の交流と活動を支える中核となる層を「ミドルレイヤー」とし、その活動と機能、相互連携の強化、新たな担い手創出をデジタルで促進し、地域の活性化を図っていきます。



■ デジタル区役所の推進

コロナ禍により、行政のデジタル化の遅れが明らかとなり、デジタル技術を活用した行政サービスの利便性向上や業務効率化が喫緊の課題となっています。特に、防災、福祉や地域支援などの最前線にある区役所が、デジタル技術を活用しその役割を最大限に発揮する「デジタル区役所」の姿を創造し、実現していくことが必要です。

- **民間人材も活用し区役所のデジタル化を総合的にサポート**

デジタル統括本部でデジタル化の企画支援を行うとともに、民間人材も採用したサポートチーム(Y-Tech)を設置し、創発・共創のプラットフォーム「YOKOHAMA Hack!」とも連動しながら区役所のデジタル化を共に推進します。

- **モデル区2区で様々な実証実験を行い、成功事例を横展開**

西区と港南区の2区を「デジタル区役所」のモデル区とし、オンライン相談窓口や広報のデジタル化を始め、様々なデジタル技術の実証実験などを行い、成功事例を創出し、横展開につなげます。

実証実験では、モデル区に設置する現場職員を中心とするプロジェクトチームを、デジタル統括本部のサポートチームや外部のコンサルティングにより、業務の見直しも含めたサービスデザインを伴走型で支援し、メリットを実感できる取組から試行していきます。

[R4予算事業例]モデル区(西区、港南区)へのコンサルティング等の支援

- **区役所のデジタル環境の早急な整備**

庁内無線LAN、ファイルサーバー、プロジェクターなど市庁舎に比べて遅れている区役所のデジタル環境の整備を早急に進め、WEB会議やペーパーレス化などを促進します。

[R4予算事業例]区役所庁舎内無線LANの整備

■ ハイブリッド・コミュニティの形成

これまで、区役所と地域拠点、地域の担い手などの間のコミュニケーションは、人が実際に行き来し、対面と紙の書類のやり取りを基本とする「リアルでアナログな方法」で行われてきました。

コロナ禍を契機に高齢者へのスマートフォンの普及拡大、地域拠点へのWi-Fiの整備加速など、地域のデジタル環境の変化したことを捉え、パンデミックや災害などの危機管理や地域の担い手の負担軽減などに対応するため、地域をリアル(対面)とデジタル(オンライン)のベストミックスでエンパワーメントする「ハイブリッド・コミュニティ」を形成していきます。

● 区役所と地域拠点、地域の担い手のデジタルネットワーク形成

身近な地域拠点に急速に整備されたネットワーク環境と今後整備を加速する区役所のデジタル環境を活用した、リアルとオンライン両方のコミュニケーションを可能とするデジタルネットワークの形成を図ります。

実証実験などの取組をとおして「ミドルレイヤー」の活動、機能や相互連携の強化につなげます。

● 地域の担い手をアプリなどデジタル技術を活用しエンパワーメント

地域の担い手の負担軽減と新たな担い手の確保につなげるため、令和4年度本稼働予定の消防団活動の支援アプリを始めとして、タブレットやスマートフォンアプリ等を活用した活動支援の取組を検討していきます。

● 「デジタルデバイド」として取り残さない取組

デジタル機器に不慣れな高齢者等への地域講習会等の取組を支援するなど、多様な活動主体との連携・協働を図りながら取組を進めていきます。また、スマートフォンをお持ちでなくても、身近な地域拠点でデジタル技術を活用したサービスを受けることができる環境整備などに取り組んでいきます。

[R4予算事業例]区役所デジタル化のモデル区(西区、港南区)へのデジタル人材派遣等の支援、消防団活動の報告事務等へのスマートフォンアプリの活用、区と地域団体等が連携して行うデジタルデバイド対応の推進など

重点方針4：先行、先進のプロジェクトを地域や都市レベルで展開・発信

- ・様々な分野・地域でデジタル技術を活用し付加価値を創造し、横浜の魅力向上につなげます。
- ・「防災」「子育て」「教育」を先行して取り組む重点3分野とし、リーディングプロジェクトを展開します。
- ・「郊外部」「都心部」では、それぞれのエリア特性に着目した先進モデル都市プロジェクトを展開します。

■ リーディングプロジェクト

横浜の魅力を向上させるため、都市を構成する「暮らし」、「産業」、「環境」、「インフラ」など、様々な分野において、デジタル化により付加価値を高めていきます。

人口減少や高齢化の進展、多発する自然災害のなかで、持続可能な横浜を実現するためには、安全安心で、子育て世代に選ばれる街であることが必要です。そこで、「防災」「子育て」「教育」の3分野をリーディングプロジェクトとして取り組みます。

● ①防災DXプロジェクト

近年、風水害は激甚化・頻発化するとともに、首都圏を襲う大規模地震はいつ発生してもおかしくないとされています。デジタル技術を活用した迅速確実な災害情報の収集や提供、適切な避難、インフラの管理などにつなげ、大都市横浜の安全安心を創り出します。



● ②子育てDXプロジェクト

子育て世代から選ばれる都市となるため、アプリ等を活用した子育て支援サービスを利用しやすい環境の充実や、各種手続のオンライン化による利便性向上などを進め、安心して子どもを産み育てられる環境を実現します。



● ③教育DXプロジェクト

コロナ禍で加速したGIGAスクールにより大きく教育環境が変化するなか、デジタルツールや26万人の児童生徒のデータを活用し、「個別最適な学び」と「社会とつながる協働的な学び」の実現に向け取り組む等、未来を担う子どもたちの新たな教育環境を創造します。



■ 先進モデル都市プロジェクト

横浜市は、少子高齢化、グローバル化が進展する中で、**解決すべき多くの課題を抱えており、地球温暖化や感染症などの世界が直面する課題に対しても、大都市として、その解決に貢献していく責務があります。**一方で、都市としての発信力の高さから、課題解決のフィールドや関心を持っていただける企業や団体等が多く存在しています。

郊外部、都心部の両面から、それぞれの特性に応じた先進プロジェクトを多様な主体とともに展開し、課題の解決をはかるとともに、社会への貢献をととして魅力的な都市の実現につなげていきます。

● 郊外部における取組(デジタルタウンの創生)

郊外部では、少子高齢化、大規模団地の老朽化、空き家、地域交通、担い手不足などの地域課題に直面しています。デジタル技術を活用し、区と地域、企業、大学等が連携して課題解決に取り組むとともに、**新たな生活様式や働き方にも対応する郊外部の魅力を再創造し、子育て世代を含め、多くの人に選ばれるまちづくりに取り組みます。**

[取組例:路線バス自動運転プロジェクト、集合住宅を活用したIoT実証実験]

● 都心部における取組(デジタルシティへの発展)

都心部には、大企業の研究開発拠点やスタートアップ企業が多数集積するとともに、多くのビジネス客や観光客が来訪しています。**都心部が持つポテンシャルを生かし、最先端技術を活用した先進プロジェクトを展開・発信することで、魅力的なまちづくりにつなげます。**

[取組例:MaaSアプリ&連動サービス、ローカル5Gを活用したイベント開催実証実験]

● 2027横浜国際園芸博覧会の取組

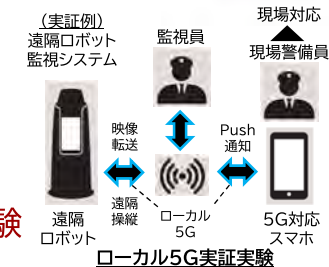
2027年国際園芸博覧会では、博覧会協会と連携し、**リアルとデジタルを連動させ、魅力的な体験の提示や環境負荷低減の提案**を行います。



自動運転バス実証実験



MaaSアプリ & 連動サービス



ローカル5G実証実験

重点方針5 : デジタル×デザインを戦略的に推進する体制の強化

- ・DX戦略、特に「デジタル×デザイン」の考え方を全庁に浸透させ、変革に前向きな組織風土を醸成します。
- ・デジタル統括本部に「デジタル・デザイン室」を新設、ICT運用部門を統合し推進体制を強化します。
- ・民間人材を活用したサポートチームと区局の「デジタル・デザイン担当」の連携によりDXを推進します。

■ DX戦略による考え方や方向性の共有

本戦略によって、デジタル×デザインという考え方と取組姿勢、DX実現に向けた方向性や戦略を明確にし、庁内向けの広報や研修など様々な場面で全庁的な戦略の浸透を図ることにより、職員のデジタル変革への意識を高め、変革に前向きな組織風土を醸成していきます。

■ デジタル統括本部の機能強化

デジタル×デザインを戦略的にリードするDX推進のエンジンとして機能するよう、必要な体制強化を進めます。

民間人材の活用など人的な支援に合わせ、区局からの提案を引き出し先進的な取組を予算面でも支援するなど、区局を後押ししていきます。

● デジタル・デザイン室の設置

デジタル統括本部にデジタル・デザイン室を設置し、区局への相談支援体制を整えるとともにデジタル×デザインの普及と実践に取り組みます。**民間人材の活用、様々な主体との共創など、多様な知を活かした官民の連携により市民や地域がデジタルの恩恵を実感できるベストプラクティスを創出し、発信して**いきます。

● ICT運用部門の統合

デジタル×デザインを実践していくために、**企画部門と開発・運用部門が両輪として一体的に機能**することが重要であるため、ICT運用部門をデジタル統括本部に統合します。

デジタル・デザイン室の主な機能

■ デジタル×デザインの実践によるDX

デジタル統括本部が中心となり、行政のDXや地域、都市のDXを、**区局や多様なパートナーを巻き込みながらデジタル×デザインの実践により実現していくための、風土づくり、モデルづくりから実装への展開をリード**します。

■ 区局デジタル化のサポート

区局がデジタル化を推進するうえで、専門人材が不足が大きな課題です。デジタル統括本部に、**民間人材も採用した区局のデジタル化推進をサポートするチーム(Y-Tech)を設置し、区局別の担当制の導入**するなど、区局が相談しやすく、DXを共に推進していくことのできる体制づくりを進めます。特に「デジタル区役所」のモデル2区には伴走型で支援を強化していきます。

■ 共創、DXの取組の発信

DXの取組と、それによって生まれた成果を庁内外に発信して、職員の意識向上、機運醸成につなげるとともに、デジタル技術を持つ**民間企業の実証実験への参加や効果的なデジタル化の提案**などを誘発し、共創の取組を加速させます。

● 多様な人材の活用

区局への「デジタル・デザイン担当」の兼務発令

区局の企画担当部署を中心に「デジタル・デザイン担当」を兼務発令し、デジタルツールを活用した情報共有や意見交換、DX関連の研修などにより、デジタル×デザインをともに実践していきます。

民間人材の登用

DXで「X(変革)」を実現するためには、行政内部の視点・価値観だけでは困難です。**民間人材の活用を任期付や兼業・副業など多様な採用形態**で行い、外部からの視点・価値観を取り入れていきます。

重点方針6 :創発・共創とオープンイノベーションの仕組みづくり

- ・行政や地域の課題を、デジタル技術を持つ企業や大学、団体と連携し解決する仕組みをつくります。
- ・横浜の強みを活かした創発・共創のプラットフォーム「YOKOHAMA Hack!」を始動します。
- ・横浜のDXを応援する「YOKOHAMA Hack!パートナーズ」を結成し、つながりを推進の力にします。

多様化・複雑化する行政・地域課題に対応するには、日々進化するデジタル技術を活用するとともに、ユーザー目線での新たな行政サービスの創出が必要であり、そのためには行政のリソースだけではなく、民間企業等を含めた幅広い視点が不可欠です。

横浜市は、東京に隣接し、大企業のR&D部門やスタートアップ企業、大学・大学院などが多く立地するなど、高度な人材やインフラが集積する大都市としての強みを持っています。

また、全国最大の人口を抱える基礎自治体であり、多くの地域の担い手の活発な活動と地区センターや地域ケアプラザ、コミュニティハウスなど多様な地域活動拠点が相互に連携し機能する地域コミュニティの基盤があります。

加えて、大都市としての発信力、新たなデジタル・ソリューションの実証や実装の場としての魅力があり、横浜のDXを後押しするパートナーを国内外から呼び込むポテンシャルがあります。

こうした土壌を活かし、行政や地域の課題を、デジタル技術を持つ企業や大学、団体と連携し解決する仕組みとして、創発・共創のプラットフォーム「YOKOHAMA Hack!」と、DXを応援する「YOKOHAMA Hack!パートナーズ」を結成します。デジタル技術を持つ企業、大学、団体等との連携による「共創」で、1+1を超えたイノベーション「創発」を生み出し、革新(=X)によって新たな横浜の未来を切り開きます。

[R4予算事業例]民間企業等との創発・共創のプラットフォームの整備・運営(YOKOHAMA-Hack!)

YOKOHAMA Hack! ～創発・共創によるデジタル・ガバメント推進の取組～

YOKOHAMA Hack!

～課題を有する行政や地域の現場と、デジタル技術を持つ多様な主体との架け橋となる～

機能1:課題(ニーズ)発見・吸上げ

- デジタル・デザイン室
- プロジェクトの設置
 - ・デジタル区役所(モデル区)
 - ・リーディングPJ(防災・子育て・教育)

マッチング

機能2:多様な改善提案(シーズ)の引出し

- YOKOHAMA Hack!パートナーズ

DG実証実験事業
[行政課題×モデル]

機能3:DX創発・共創の誘発支援

- オープンなプラットフォームの運用
- マッチングコーディネート機能
- 創発・共創のプロモーション

既存の共創の取組

I・TOP横浜ラボ
[社会課題×ビジネス創出]

共創フロント
[協定等による官民連携]

●YOKOHAMA Hack!

課題を有する行政や地域の現場と、デジタル技術を持つ多様な主体の創発・共創による、デジタル・ガバメントの推進を目指します。

様々な行政課題・地域課題に対して、企業・団体等から提案いただいたデジタルソリューションをマッチングし、課題のタイプや必要な解決手段、提案企業の状況に応じて既存の共創の取組と合わせて、柔軟に手法を選択しながら住民サービスの利便性向上や、新たな価値を提供するサービスを創出します。

●「YOKOHAMA Hack!」パートナーズ

本市のDX関連の情報を共有し、本市とともにデジタル技術を活用した行政課題・地域課題の解決に取り組む意欲のある企業等を「YOKOHAMA-Hack!」パートナーズとし、デジタルガバメントを推進していきます。

(令和3年12月募集開始)

重点方針7:セキュアで活用・連携しやすいデータ基盤の整備

- ・マイナンバー制度、住民情報系システムの標準化など全国共通のデジタル基盤の整備と活用を進めます。
- ・庁内システム再構築、データ基盤整備、オープンデータ化によりデータの積極的な利活用を推進します。
- ・デジタル化推進に不可欠なセキュリティ対策を技術的・人的・組織的な側面から総合的に取り組みます。

■ データ活用・連携の基盤の整備

全国的なデータ連携・活用の基盤となっているマイナンバー制度における情報連携や、情報提供ネットワークを介した自己情報の活用により、行政内部の事務処理の効率化や市民の皆様の利便性向上に取り組みます。また、住民データの形式統一に資する住民情報系システムの標準化を計画的に推進するとともに、国が進める社会共通データベース「ベース・レジストリ」整備への参画など、全国共通のデジタル基盤づくりを進めます。

さらに、財政見える化ダッシュボードやオープンデータなどデータによる市政の見える化、財務会計・人事給与システムの再構築により庁内データの活用と業務効率化を進めるほか、政策形成や都市経営などにデータを活用するための調査・検討などにも取り組みます。

[R4予算事業例]データ活用に推進に向けた調査・検討、住民情報系システムの標準化対応、財務会計・人事給与システムの再構築など

■ サイバーセキュリティの確保

利便性の高いデジタル環境の整備、特にクラウドサービスの利活用では、世界中どこからでもアクセスが可能となるため、技術的・人的・組織的な側面からより高いセキュリティ対策が重要となります。

インターネットの利活用推進にあたり、個別のPCの挙動を監視し、サイバー攻撃の予兆・検知を可能にする高度な対策(EDR)を導入し、併せて事件・事故発生時の即応体制(CSIRT)を再整備します。さらに、クラウドサービス利用における不正アクセス対策などの検討を進めます。

また、専門人材の育成や全職員の情報管理意識の向上などの人的対策、個人情報保護の制度運用、データの重要度に応じた情報管理などの組織的対策を総合的に実施し、セキュリティを確保していきます。

[R4予算事業例]インターネット利用環境再整備、大学院でのセキュリティ人材育成など

データ活用推進の取組

横浜DX戦略は、「横浜市官民データ活用推進計画」を兼ねるものとして位置づけます。

(「2. 戦略の位置づけ」で記載)

これにより、これまで以上に効率的、効果的な政策形成や都市経営にデータを活用する取組を進めます。

■ 政策形成や事業実施において、更なるデータ活用を推進

政策の形成や、事業の実施、事業の振り返りなどの各フェーズで、的確に状況を把握、分析し、必要な政策をより効率的に実施するためには、データを有効に活用して判断・決定していくことが大切です。

様々な分野や、地域によってそれぞれ異なる政策課題に対して、データの活用に関する事例の共有や相談・支援体制を強化します。さらに、DX分野とデータ活用分野の育成プログラムを統合して一体的に人材育成を進める体制を検討します。

また、横浜市中期4か年計画の推進や予算編成・執行にデータをより活用するためのあり方や、政策推進に資するデータの横断的共有を検討するなど、庁内における更なるデータ活用に取り組みます。

■ 市民とデータを共有

市民等と共有し活用できる重要な資産である市のデータを、地域課題の解決や市内経済の活性化に向けた活用に生かせるようデータの公開を進めます。

そのため、財政見える化ダッシュボードによる市政の見える化や、統計情報・地理情報などのオープンデータの公開などにより、市民が市政のデータに触れ、活用しやすい環境を整える取組を強化します。

住民情報系システムの標準化による市民サービス向上や業務効率化

住民基本台帳、税務など法定事務の処理を支える基幹系システムは、共通性が高いにもかかわらず各自治体で整備・運用されてきたため、通常の維持管理に加え制度改正時の改修対応などの負担が大きくなっていました。

令和3年9月施行の「地方公共団体情報システムの標準化に関する法律」により、住民情報系20業務のシステムを、令和7(2025)年度末までに、国の標準仕様に準拠したシステムへ移行することとしています。

■ 住民情報系システムの標準化の着実な推進

標準化によってデータ形式等が統一され、自治体間の円滑なデータ連携が可能となるため、サービス面の向上に加え、国が取り組む「ベース・レジストリ」整備等の波及効果が期待できることから、令和3年度に先行着手した税務システムを皮切りに住民情報系システムの標準化移行を着実に推進します。

■ 標準化を市民サービス向上につなげる対象業務の見直し・再構築

データ形式や帳票などを標準的な仕様に対応させることが前提となる標準化移行を契機に、給付金など全国一律の施策に対する迅速な実施、手続のワンストップ化・ワンズオンリー化など、利便性に配慮した市民サービス向上をめざして、対象業務の見直し／再構築(BPR)に取り組みます。

■ 移行の負担が大きい大都市と連携した早期情報提供や財政支援を国に要望

短期間に集中して対象システムを移行するだけでなく、業務見直しや、標準化対象以外の関連システム整備も必要になることから、大都市では特に財政的・人的負担が大きくなります。「指定都市市長会」「九都県市首脳会議」で政令市などと連携し国に対し早期の情報提供や財政支援を要望し、効率性や利便性などの効果につながる標準化への円滑な移行環境を整えます。

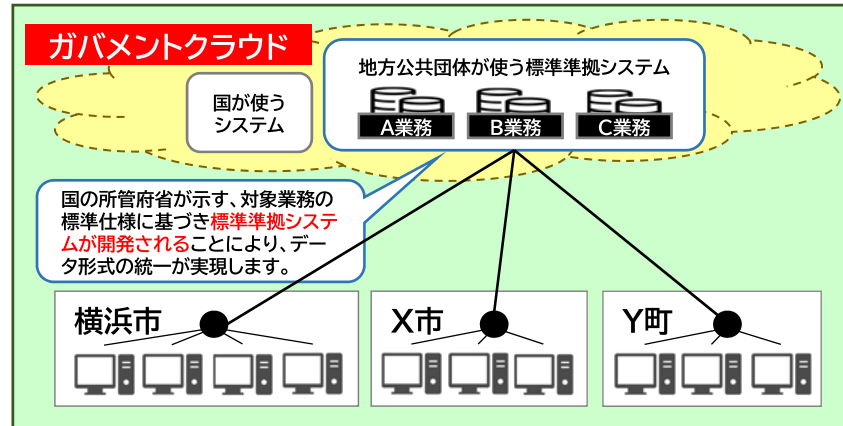
【参考】住民情報系システムの標準化の対象事務等

標準化の対象事務と本市における業務所管局

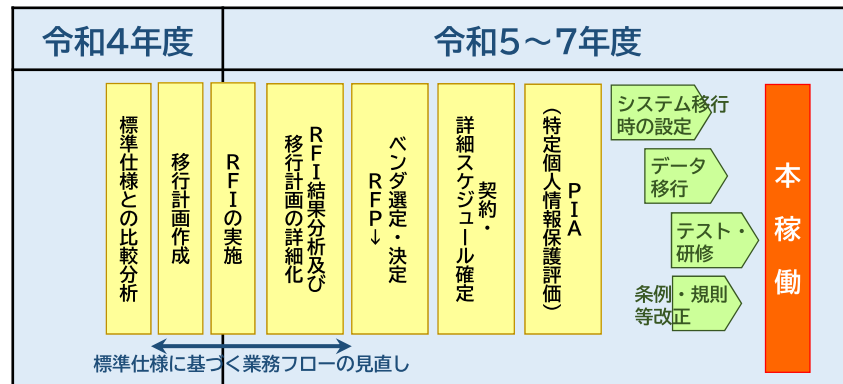
No	標準化の対象事務	本市における業務所管局
1	児童手当	こども青少年局
2	子ども・子育て支援	
3	住民基本台帳	市民局
4	戸籍の附票	
5	印鑑登録	
6	選挙人名簿管理	選挙管理委員会事務局
7	地方税（固定資産税）	財政局
8	地方税（個人住民税）	
9	地方税（法人住民税）	
10	地方税（軽自動車税）	
11	戸籍	市民局
12	就学	教育委員会事務局
13	健康管理	健康福祉局・こども青少年局
14	児童扶養手当	こども青少年局
15	生活保護	健康福祉局
16	障害者福祉	健康福祉局・こども青少年局
17	介護保険	健康福祉局
18	国民健康保険	
19	後期高齢者医療	
20	国民年金	

上記は標準化法に基づく政令(令和4年1月)の順序で記載

標準準拠システムの利用イメージ



国が示すスケジュール【令和7(2025)年度末まで】



「自治体DX推進手順書」(令和3年7月)の内容を基に一部改変

用語解説

索引	用語	解説
5	5G (ファイブジー)	第五世代移動通信システム。高速・大容量・低遅延・多接続といった通信が特徴。
A	AI (エーアイ)	Artificial Intelligence(アーティフィシャル・インテリジェンス)の略。 人間の知的営みを行うことができるコンピュータプログラムのこと。一般に「人工知能」と和訳される。
A	AI-OCR (エーアイ・オーシーアール)	Artificial Intelligence-Optical Character Recognition(アーティフィシャル・インテリジェンス・オプティカル・キャラクター・レコグニション)の略。 人工知能技術を取り入れた光学式文字認識機能。
B	BPR (ビーピーアール)	Business Process Re-engineering(ビジネス・プロセス・リエンジニアリング)の略。 企業等が活動の目標を達成するために、既存の業務内容や業務フロー、組織構造などを見直し、再構築すること。
C	CSIRT (シーサート)	Computer Security Incident Response Team(コンピューター・セキュリティ・インシデント・レスポンス・チーム)の略。 システムにおける情報漏えいや障害など、事業・業務上の脅威が発生した際に対応するための組織。
E	EDR (イーディーアール)	Endpoint Detection and Response(エンドポイント・ディテクション・アンド・レスポンス)の略。 パソコンやサーバーなどのネットワークの末端に接続された装置を監視し、サイバー攻撃による異常や不審な挙動を検知するシステムやソフトウェア。
G	GIGAスクール (ギガスクール)	児童生徒向けの1人1台端末と高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備し、誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化された創造性を育む教育を全国の学校現場で持続的に実現させる構想。
I	IoT (アイオーティー)	Internet of Things(インターネット・オブ・シングス)の略。 モノのインターネット。家電製品や車、建物がインターネットを通じて、サーバーやクラウドサービスや相互接続され、モニタリングやコントロールを可能にする仕組み。
L	LGWAN (エルジーワン)	Local Government Wide Area Network(ローカル・ガバメント・ワイド・エリア・ネットワーク)の略。 総合行政ネットワークのこと。地方公共団体の組織内ネットワークを相互に接続し、コミュニケーションの円滑化、情報の共有による情報の高度利用を図ることを目的とする、高度なセキュリティを維持した行政専用のネットワーク。
M	MaaS (マース)	Mobility As A Service(モビリティ・アズ・ア・サービス)の略。 新たな移動サービスの提供。自動車などを所有ではなく共有して利用するシェアリングサービス、スマートホンで検索・予約・決済ができるオンライン配車サービス、自動運転バスなどがある。
P	PIA (ピーアイエー)	Privacy Impact Assessment(プライバシー・インパクト・アセスメント)の略。 特定個人情報保護評価のこと。国や地方公共団体等が、マイナンバーを含む個人情報を扱う事務を開始する段階等で、個人情報に対するリスクを分析した上で、そのリスクの防止・軽減のため適切な措置を講ずる仕組み。

索引	用語	解説
R	R&D (アールアンドディー)	Research and Development(リサーチ・アンド・デベロップメント)の略。 新製品・新製法についての研究開発。
R	RFI (アールエフアイ)	Request For Information(リクエスト・フォー・インフォメーション)の略。 情報提供依頼。製品やシステム開発の企画・検討段階で、業者に技術的な情報提供を依頼すること。より良い製品やサービスを調達するために、新たな技術の情報やアイデアを幅広く収集することを目的としている。
R	RFP (アールエフピー)	Request For Proposal(リクエスト・フォー・プロポーザル)の略。 提案依頼。製品やサービスの発注やシステム開発に際し、RFIなどを通じて得られた情報を基に、詳細を示して個別具体的な提案、正確な見積金額などを候補の業者に求めること。実現可能性の確認、必要な金額の精査を行い、仕様を絞り込むことを目的としている。
R	RPA (アールピーイー)	Robotic Process Automation(ロボティック・プロセス・オートメーション)の略。 人工知能を備えたソフトウェアのロボット技術により、定型的な事務作業を自動化・効率化する。
S	SaaS (サーズ)	Software as a Service(ソフトウェア・アズ・ア・サービス)の略。 インターネットを経由してソフトウェア(情報システム)を利用するサービス。ソフトウェアのインストール不要で、WEBブラウザから利用する形態が一般的。環境構築などが不要なため、導入が容易。
U	UX (ユーエックス)	User Experience(ユーザーエクスペリエンス)の略。 製品やサービスを利用を通じて得られる体験(製品の使い心地、満足感、ストレスの少なさなど)の総称。
あ	アジャイル	英語の「agile」という単語で、「俊敏な」「素早い」などの意味。企画、設計、開発、構築の各段階で、試行と修正を素早く繰り返しながら、より使いやすく効果的なシステム、サービスをつくりあげる手法。
あ	アフターコロナ	新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が世界的に流行した後の社会。
い	イニシアチブ	率先して行動し、物事のある方向へ導く力。自分がリーダーとなり物事を進めていくこと。
い	イノベーション	新しい技術や考え方を取り入れて新たな価値を生み出し、社会的に大きな変化を起こすこと。
え	エンパワーメント	本来持っている能力、活力を引き出し活性化させること。
お	オープンイノベーション	自らの組織だけでなく、民間企業や大学などの外部の知識・技術・ノウハウを組み合わせ、革新的なビジネスモデルやサービスを生み出すこと。

索引	用語	解説
か	ガバメントクラウド	内閣官房情報通信技術(IT)総合戦略室が定義した、『政府共通のクラウドサービス環境』。政府のみではなく、政府・地方自治体が共通活用できるクラウド基盤として想定され、標準化では、複数の開発事業者が、ガバメントクラウド上に標準仕様に準拠したシステムを構築し、地方自治体はそれらの中から適したシステムを選択できるようになる予定。
き	共創	多様な立場の人たちと対話しながら、新しい価値を「共」に「創」り上げていくこと。
く	クラウド	クラウドコンピューティングの略。 インターネットを経由して、データセンターにある、ソフトウェア、ハードウェア、データベース、サーバーなどの各種リソースを利用するサービスの総称。
こ	コネクテッド・ワンストップ	行政・民間をまたがり、複数の手続・サービスを一つの窓口・WEBサイトで利用できること。
せ	セキュア	「安心な」「安全な」。情報システムなどが保護されて安全な状態にあることをいう。
そ	創発	個々人の能力や発想を組み合わせることで創造的な成果に結びつける取組。
て	デザイン思考	意匠デザインを行う時のような自由なマインド、プロセス、方法を用いて、課題解決や新たな価値創造を行うこと及びその際の思考法。具体的には、目的の共有、課題の抽出、アイデアの創造、プロトタイプを試作とテストといったプロセスにおいて様々な手法を駆使して、新しいソリューションを生み出す方法。
て	デジタル・ガバメント	デジタル技術の徹底活用と、官民共同を軸として、全体最適を妨げる行政機関の縦割りや、国と地方、官と民という枠を超えて行政サービスを見直すことにより、行政の在り方そのものを変革していくこと。
て	デジタル・ソリューション	情報システムやデジタル化された仕組みを用いて問題や課題を解決すること。またはそのための情報システム。
て	デジタルデバイド	知識や環境により、コンピューターやインターネットを使える人と使えない人の間に生じる格差。デジタル格差、情報格差とも呼ばれる。
て	デジタルファースト	個々の手続・サービスが一貫してデジタルで完結すること。
て	データドリブン	得られたデータを総合的に分析し、未来予測・意思決定・企画立案などに役立てること。

索引	用語	解説
の	ノーコード、ローコード	専門的な知識を必要とするプログラムコード(プログラミング言語)を用いずにシステム開発できるツールや環境。ノーコードは、画面上の設計のみで、ローコードは、わずかなプログラムコードの使用のみでアプリ開発が行える。
は	ハイブリッド	異なるものの組み合わせたり、掛け合わせたり、併用したりすること。
ひ	ぴったりサービス	政府が運用するオンラインサービス「マイナポータル」で、子育て・介護・被災者支援など、各自治体の様々な分野の選択、オンライン申請できるシステム。
へ	ベストプラクティス	サービスやシステムを構築する際に、参考となる最良の実践法の例。最善の方法の例。
へ	ベストミックス	複数の手段を組み合わせることで最も効率的な解決策を得ること。
へ	ベース・レジストリ	公的機関等で登録・公開され、様々な場面で参照される、人、法人、土地、建物、資格等の社会の基本データであり、正確性や最新性が確保された社会の基盤となるデータベース。
ま	マイナポータル	社会保障・税番号制度(マイナンバー制度)の導入に併せて国が新たに構築した、国民一人ひとりがアクセスできるポータルサイト。マイナンバーに紐付いた自分の情報を、行政機関がいつ、どこでやり取りしたのかを確認したり、各自治体のサービスの検索やオンライン申請ができる。
り	リスキリング	Reskilling。技術の進展などによる産業構造の変化によって、今後、新たに発生する業務や職種に必要な能力やスキルを習得することを目的に、人材の再教育や研修をする取り組み。
り	リソース	資産。資源。サービスや業務を提供するために必要なもの(人、モノ、金など)の総称。
り	リーディングプロジェクト	取り組むべき課題や問題点等を抽出し、その課題を解決するために取り組む開発課題。
り	リードタイム	目的のものが得られるまでの所要時間。発注や申込から、製品やサービスが提供されるまでの時間。
ろ	ローカル5G	通信事業者ではなく、企業や自治体などが独自に運用する第五世代移動通信システム(5G)の通信ネットワーク。
わ	ワンスオンリー	申請や手続きにおいて、一度提出した情報は、再度、記入や提出を不要とする取組。



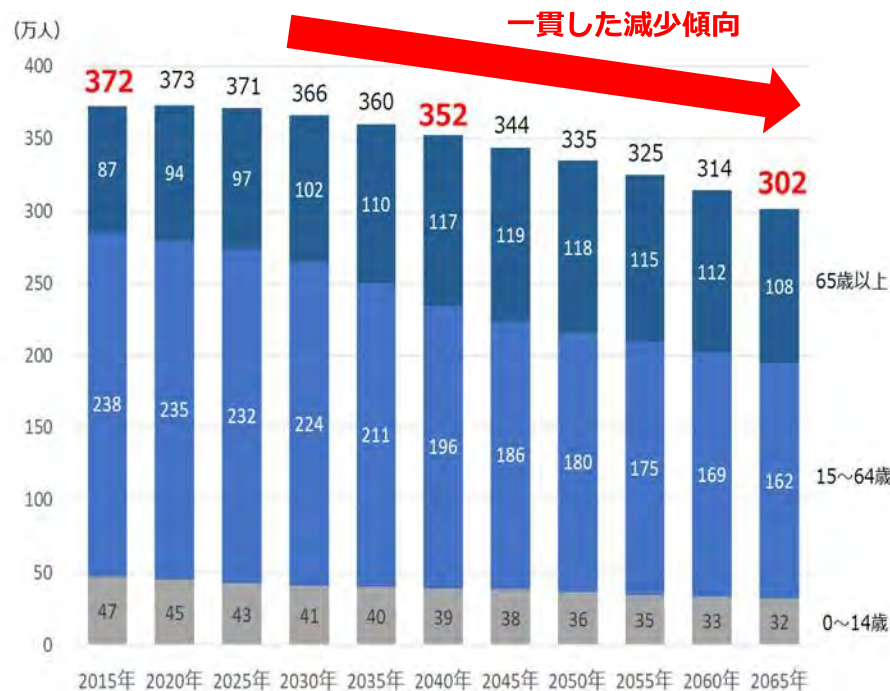
參考資料

横浜市の将来人口の推計値

2015年を基準時点とし、2065年まで各年を推計

2015年(372万人)を基準時点として将来人口を推計した場合、2040年に352万人(▲20万人)、2065年には302万人(▲50万人)となることが推計される。

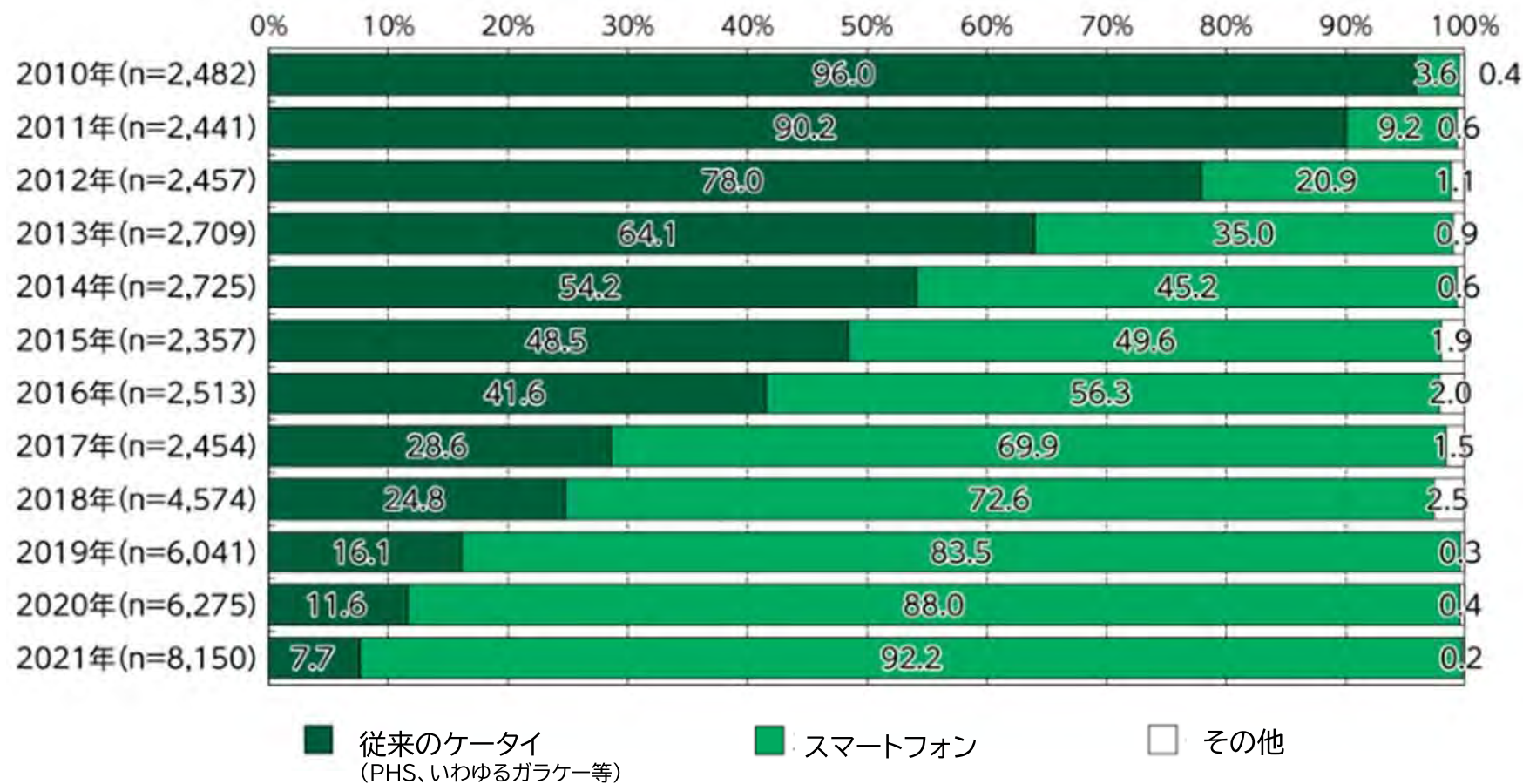
65歳以上の高齢者の割合は今後上昇傾向にあり、2015年の23%(4人に1人が高齢者)が、2040年には33%(3人に1人)にまで上昇することが見込まれる。



※基準年人口:2015(平成27)年国勢調査

最もよく利用する携帯電話の年次推移

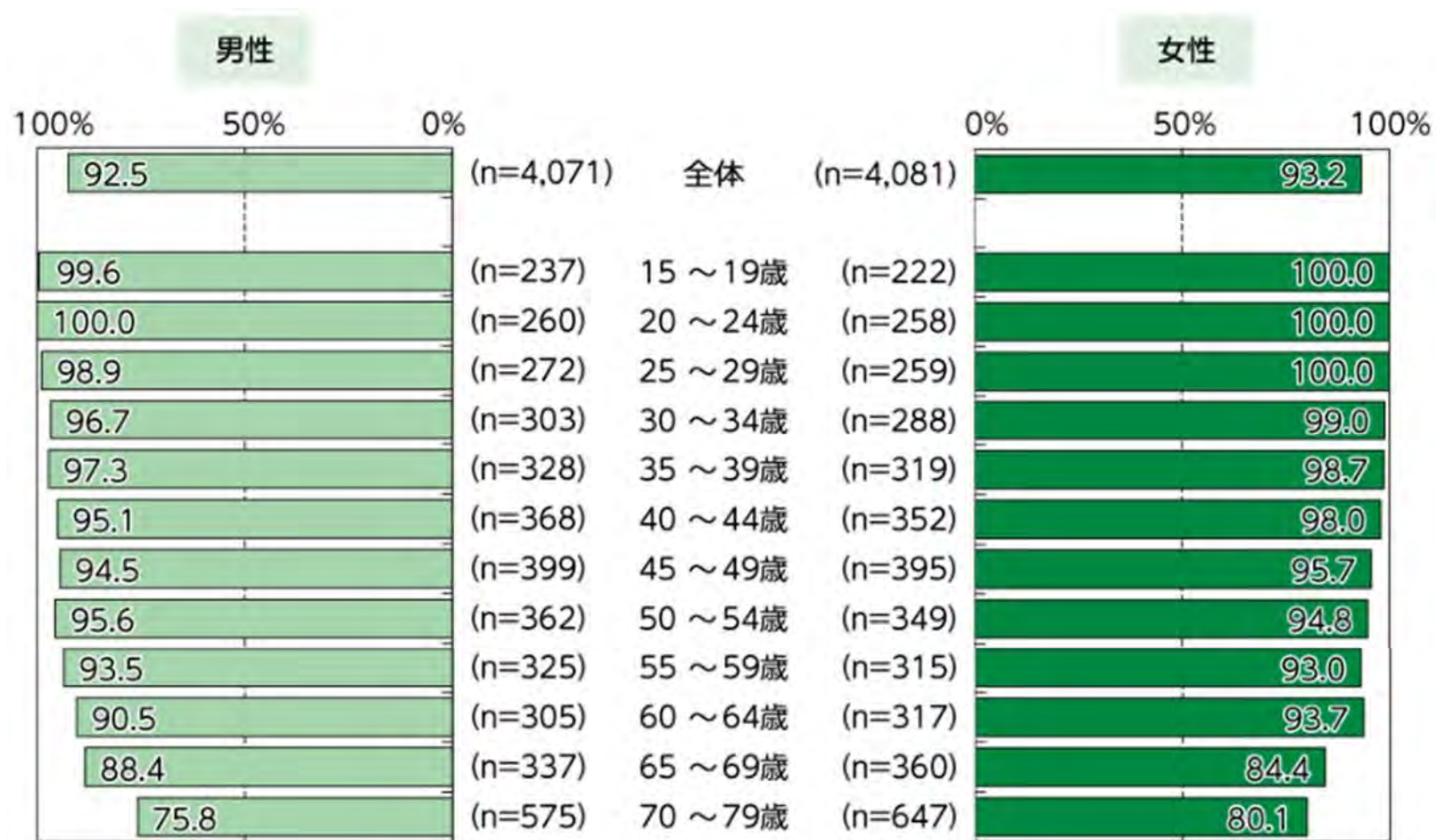
携帯電話のうち、スマートフォンの利用割合は急激に増加しており、2021年の利用割合は92.2%となっている。



(出典)「モバイル社会白書(2021年版)」(モバイル社会研究所)

スマートフォン比率(年代別)

スマートフォンの年代別利用割合は、15～64歳で90%を超えている。また、65～69歳で80%以上、70～79歳で75%以上となっている。



(出典)「モバイル社会白書(2021年版)」(モバイル社会研究所)

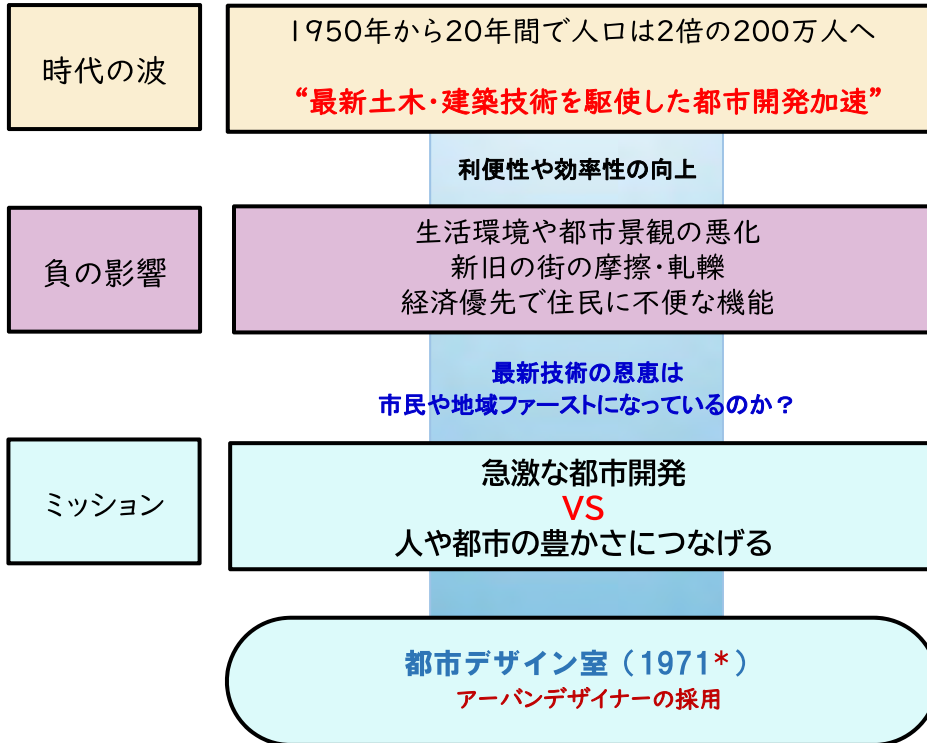
都市デザイン室から50年の時を経てデジタル・デザイン室を始動

横浜の都市デザインは、戦後の復興と高度成長期の都市化の波が押し寄せる中、様々な都市問題に対処し、自律的都市の構築を目指す戦略として誕生し、1971年に「都市デザイン担当」が設置され、2021年に50周年を迎えました。

都市デザイン室は、都市問題への対処にとどまらず、都市づくりに「機能性や経済性などの価値観」と、美しさ、楽しさ、潤いなどの「美的価値・人間的価値」をバランスさせ、特徴と魅力ある都市空間を形成する役割を担ってきました。

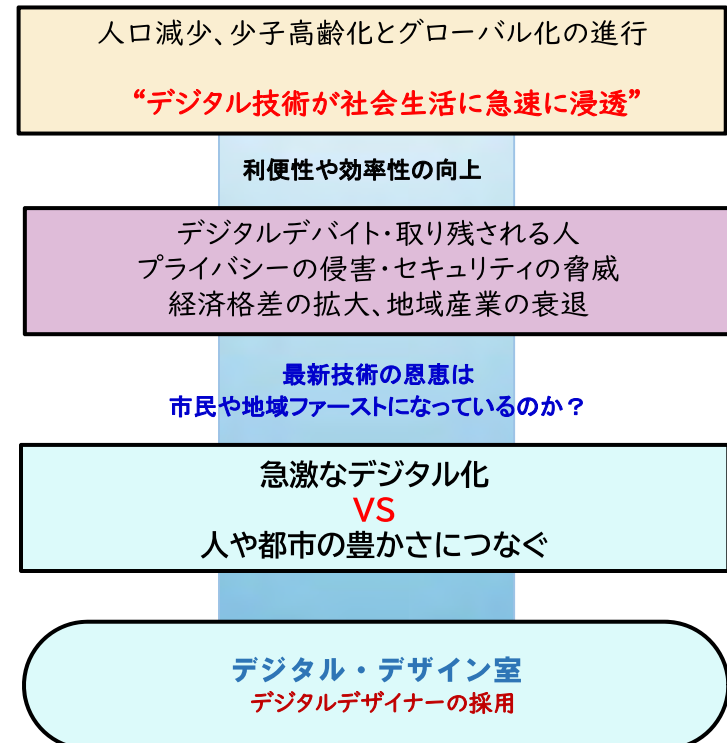
今、デジタル化の波が広がる中で、再びデジタルを人や地域、都市の豊かさにつなげるデザインが求められています。

1970年代 ⇒ 高度成長期の要請として



*都市デザイン担当としてスタート

2022年 ⇒ デジタル社会の要請として



×

横浜市DX戦略(仮称)骨子案公表にあたって
山中竹春 横浜市長からのメッセージ
アドレス：<https://youtu.be/yBFla2wDoMY>



横浜市デジタル統括本部 公式note トップページ
アドレス：<https://yokohama-city.note.jp/>

